

工業化の進展

19 世紀後半から、日本では急速な工業化が進んだ。その波は 20 世紀に入り、大量生産という形で市之倉にも押し寄せてきた。

プレスやスリップキャストに石膏型が導入され、石炭や石油を使った窯も登場した。これらの進歩により、型を用いて器の大量生産や短時間での焼成が可能になった。また、装飾を施すために銅版転写や型押しの技法が普及し、新しい釉薬も開発された。顔料は、銅、鉄、コバルトの 3 種類の鉱物から作られていた。しかし、国際貿易が盛んになるにつれ、他の色も使われるようになった。例えば、奥の壁にある翡翠色のカップには、ドイツの酸化クロム系の釉薬が使われている。

奥の壁には、20 世紀に地元で生産されたさかづきが展示されている。大量生産により、個々の作品が均一化される一方で、より多くの人々が磁器を手に入れられるようになったほか、形やデザインの幅が広がったことも、展示されているさまざまなカップからうかがえる。

右のケースに入っているのは、京都、有田、九谷、瀬戸といった陶磁器の主要産地のさかづき。それぞれの地域の特徴的なモチーフや色が施されており、シンプルなカップだけで幅広い芸術表現が可能であることがわかる。